

出会い

奥村 一郎

はじめに

「思い出」と「記憶」とは同じようで、かなりちがっている。外国語にもたいてい、このようなふたつの区別がある。フランス語の *souvenir* (スヴニール、思い出) は今では、観光客相手の「おみやげ店」の看板になっている。*souvenir* は、*sous* (下に) と、*venir* (来る) との合成語だ。「記憶」の種が、個々人または国家、民族、さらに人類の歴史の大地に蒔かれて、やがてそこから芽が出て、花が咲くのが「思い出」である。記憶は時とともに流れ去るが、思い出は過ぎ去った出来事を今に生かす懐かしのメロディである。ドイツ語の *Geschichte* 「出来事としての歴史」と、*Historie* 「記録としての歴史」の区別とも似ている。

記憶は消えてゆく。しかし、思い出は時とともに深まることによって、その人、その国、その民族の歴史を養う糧となる。記憶は記録として残され、思い出は血となり肉となって、次の世代に命を伝える。記憶は文字になるが、思い出は活字にはならない。「不立文字。以心伝心」という禅語に通ずる「心のことば」が思い出である。ことばや記録がなければ記憶は風化する。しかし、心の歴史である思い出は神と人とのひそかな対話となって永遠につづく。

戦後すでに五十年余、戦中世代が年ごとにすみやかに他界していく今、残されたもののささやかな体験の思い出を残すようにとの、友人・知人のすすめを素直に受ける気持ちになったのも年のせいかもしれない。老いのたわごとというようなことにしかならないであろうが、遠い思い出ともつかぬ話のいくつかを記させていただく。

1. 禅との幸いな出会い・

キリスト教との不幸な出会い

禅との幸いな出会い

そのころ、誰がすすめてくれたのか覚えていない。ともかく、今に劣らぬ激しい受験競争の修羅場を乗り越えて、昭和十八年四月、旧制一高に入学。早々に手にした本が、当時、一高校長から抜擢されて文部大臣をしておられた橋田邦彦先生の著書、『正法眼蔵釈意』二巻であった。それが道元禅師に出会うきっかけとなった。

若さの気負いと大目にみられてよいのかもしれないが、多読乱読を競う風潮のなかで、旺盛な知識欲を道元の大著『正法眼蔵』一本に集中していたことは私にとってひとつの救いになったともいえる。とくに、開巻第一章の「現成公案」は、初期にものされた(道元三十三歳)、比較的短いものではあるが、なお若かりし日の私の求道の魂を魅了するに十分であった。

「仏道、もとより豊儉より跳出せるゆゑに
生滅あり、迷悟あり、生仏あり。しかもかくのごとくなりといへども、

華は愛惜にちり、草は棄嫌におふるのみなり。……………

仏道をならふといふは、自己をならふ也。
自己をならふといふは、自己をわするるなり。

自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。

万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。
悟迹の休歇なるあり、休歇なる悟迹を長々出ならしむ。……………」

「曠古の大文章」と絶賛する現代詩人大岡信の、たぐいなき愛読書でもあった『正法眼蔵』との出会いは、以前、フランスの国境からアルプスの大連峯をはじめ眺めたときの感動にも似たものがあった。

ところで、その頃、一高から東大卒業後、まもなく出家、三島の龍澤寺の雲水修行に入り、山本玄峯老師に師事された中川宋淵禪師が毎月十三日、後輩指導のため坐禅を主とする小接心の機会を与えてくださっていた。駒場キャンパスの奥にあった、「三昧堂」と名づけられた禅堂では今も定期的に坐禅の集いがあると聞いている。脛からはだしの足に厚い朴齒の下駄をはいて、「弥生道」の名で親しまれていた銀杏並木を三昧堂に向かう青年僧宋淵禪師の一分の隙もない、しかも、しずかなぬくもりさえも感じさせる、爽やかな後ろ姿は今も眼前に浮かぶ。「不立文字、以心伝心」の悟境が、しかと響いてくるような思いがした。

精神的揺籃期ともいえる、その若き時代に、私にとって三つ子の魂ともいえるものになったのは、まさしく、道元の「無所悟、無所得、只管打坐」(悟ることなく、得ることなく、ただひたすら打ち坐る)の禅心であり、その曹洞禅の心を、修行の実際指導を通してはぐくんでくださったのが、臨済宗の師家、宋淵老師であった。

聖書との不幸な出会い

一高時代に所属していた学科は、当時「文乙」とか、「文四」ともいわれた、ドイツ語専攻の学科であった。そのため、ドイツの哲学や文学に接することが多く、また、その他の欧米思想についての知識を通じて感じとられてきたものは、西欧文化の根底にあるキリスト教の重みであった。そこで、キリスト教を知るためにはとりあえず、『聖書』から始めねばと思い、渋谷の道玄坂に出かけ、小さな古本屋でお粗末な青い表紙にザラ紙の新約聖書を購入した。どの本にしても、最初の1ページから読み始めるのはあたりまえ。ところが、そのあたりまえのことが、とんでもないことになってしまった。

「マタイによる福音書 イエス・キリストの系図」という小見出しで、次から次へと、舌ももつれるようなヘブライ語の名前が、たてつづけにでてく

る(マタイ1:1~17)。当時のわたしにとっては全くチンプンカンプンのイエスの系図、つづく、処女懐胎やそれにまつわるヨセフの夢物語、という荒唐無稽な信心物語。そんなところへ、どこからかひょいと星がでてきて旅人を導いたなどという児童劇、全く幻滅もいいところ、人生とは何か?というような究極の課題などとはおよそ縁もゆかりもないバカげたものと思えなかった。

「尽界客塵無し。直下第二人あらず」(微塵の汚れもない無限の宇宙、自己の足下に、ひとひとりなし)(『正法眼蔵』「仏性」)

こうした、現代科学も及ばぬ、透徹しきった虚空に大輪の華咲くがごとき、宗教的宇宙遊泳にも似た、まことに自由無碍の道元にみる禅の世界に比して、聖書物語は余りにも貧弱な稚拙きわまる宗教戯画(カリカチュア)でしかなかった。

それまでに、文学や哲学書などを通して、「山上の垂訓」とくに、その真福八端のことや隣人愛を越える愛敵の教え、岩波書店の商標になっている「種蒔きのたとえ」、さらに十字架と復活の物語など、おおづかみではあるがそうした光となる福音書の知識は、キリスト教への私の関心を支えてくれていただけでなく、片山敏彦とか、三谷隆正のような、深いキリスト教信仰に生きておられた良き師に学ぶ貴重な体験もあった。にもかかわらず、聖書との直接の出会いははじめそのものであった。「出会い」というよりは、まさしく出会いがしらの激突事故に終わった。

「少年老い易く、学成り難し」「光陰矢の如し、時人を待たず」とはそのころよく聞いた諺である。人生の大問題に何の答えにもならない聖書、その聖書を信条とするキリスト教なぞに、貴重な時間をムダに費やしておれない。みじめなまでに期待を裏切られた聖書は、もう永遠に無縁なものとして、その時、私の手から離れ去っていった。

それから一年たらずして、日増しに悪化する第二次世界大戦の危機に対処すべく学徒出陣の至上命令がくだった。昭和十八年十二月一日、名古屋の「中部第十三部隊」に入営するときに携帯した本は二冊だけ。道元の『正法眼蔵』(七十五帖本 大日本文庫刊行 昭和十七年)と、ニーチェの『ツァラトゥストラ』であった。

「馬鹿野郎！こんなものが戦争に役立つか?!」と大喝一声、物品検査兵にビンタをくらわされそうになって、本はただちに没収されてしまった。

2. 向陵（旧制一高）時代

失われた青春

旧制中学から大学まで、ほとんど止むことのなかった戦争の時代にかかっていたため、その頃の学校生活は、いうまでもなく、ありあまるほど物の豊かな現代社会の学生生活とはおよそ異なるものであった。「欲しがりません、勝つまでは」「天に代わって不義を討つ」、聖戦の名の下に、「滅私奉公」のスローガンを盾にして、第二次世界大戦の悲惨な終末まで、戦争から戦争へと駆り立てられてきただけではなく、「空の要塞」といわれたB29の連続爆撃と、恐るべき二つの原子爆弾によって日本全土が廃墟に化せられた敗戦後の生活は、今では想像もつかない混乱と貧困の極みにあった。その十数年間にわたるわたしの青春といえば、「失われた青春」というしかない。その間に、学生生活らしきものは旧制一高時代のわずか一年八ヶ月だけであった。

全寮生活

しかし、そのような波瀾万丈の青春にあって、夕闇に光る金星のようにただ一つ、悲しいまでに美しく、今なお失われることのない思い出は、旧制一高向陵時代の全寮生活であった。というのは、学生生活全体を通じて良き師、良き友と出会う機会がそこで与えられたということである。とくに、どこからも一切介入されることのない、学生の完全な自治による全寮生活。それが与えてくれた、優れた先輩や同輩との日々の交わりは、人間の最も根源的な真理への渇きと若き情熱とを沸き立たせてくれた。形としておよそ粗雑なものであったとしても、そのような寮生活なしには、わたしの一高時代の学生生活は魂のないものになってしまったであろう。

明治三十三年、後に首相にもなった鳩山一郎の入学に際し、男勝りの母春子夫人が狩野校長に面会し、こまやかに自宅の家庭教育の行き届いていること、それに対し、寮生活の不潔粗暴なことを列挙して、一郎の自宅通学を申し出たとき、狩野

校長はじっくりと言い分をきいたあと、ただ一言、「入寮を望まれないのであれば、どうぞ退学してください」ときっぱりいわれたという逸話がある。

夜の寮歌

わたしが寮にいたときも、約千五百人の寮生が分宿している四つの寮の建物は、どれも、今なお存続するほどの頑丈なものであったが、その中は、常識では考えられないほど汚く乱雑極まるものであった。その生活習慣は時の経過とともにいくぶん変わってきたであろうが、夜中に寮歌を怒鳴りながら廊下を練り歩き、寝ているものを叩き起こしては、一時間も二時間も説教したり議論したりするストームは日常茶飯のこと。「寮歌いこう!」と誰かが叫ぶと、一斉に「オーッ!」と応え、天井も破れるような大声で夜遅くまで歌いつづける。それに呼応して、幾つかの他の部屋も負けじとばかり歌いはじめる。別のところからは、「うるさい!やめろ!」と、窓を開けて叫ぶ。しかし、それもコーラスの中に織り込まれてしまい、青春の熱気は夜空に燃え上がる。

落書き

寮の壁といえば、落書きでいっぱい、毎年全部塗り直す費用は莫大であったという。寮生はもちろんそんなことには無頓着、新たになった壁にまた新たな落書きを始める。それも、習いたてのドイツ語やフランス語、下手なラテン語やギリシャ語など、また、哲学や文学の名文句を縦、横、斜めに無茶苦茶に書きなぐる。ときに、落書き論戦も華やか。これも、ひとつの自由教育の素材となっていたのかも知れない。しかし、そのままこれが、トイレの壁までひろがっていたのには、初めて見たとき驚いた。もちろん下品なもの一つもない。高尚な詩や歌、なかなか為になる人生訓、ときに、カウンセリングもどきの勧告まである。それを丁寧にノートにメモして、いわく『黄金文学』を作るのだと意欲に燃える先輩もいた。これと似たことは、思い出すときりがない。

無茶というか、粗暴というのか、そうした寮生活は、とにかくにも、鳩山春子ご夫人の教育理念の枠にはとうてい入りようがなかったにちがいない。

教室風景 夷狄の学

当時も、一高には名物教授といわれる先生がおられた。わたしの入学少し前には哲学を教えておられた岩元禎教授やドイツ語の菅虎雄教授などが知られていた。わたしたちの頃には、阿藤伯海という、これまた奇抜な漢文の先生がおられた。いつも羽織袴という姿で授業をされた。教室というところは聖なる場所であるから、背広などという野蛮な西洋の服をきて教えるとはけしからん、冒流の罪である、という主張であった。

ある日、その授業の前に、わたしは慌ててドイツ語の宿題を夢中でやっていた。阿藤先生が入ってこられ、扉近くの席にいたわたしをチラッと睨むようにして通り過ぎ、黙って教壇に上がられた。と、開口一番、「今ここで、聖賢の学を始めようとするときに、夷狄の学をしている馬鹿ものがいる！」と叱りとばされた。皆がどっと笑い、わたしはすぐドイツ語の本を閉じた。

しかし、わたしたちがドイツ語専攻の学生であることは、先生は百も承知のはず。それを、夷狄、すなわち野蛮人の学と言い切る先生の漢学者としての堂々たる主張に、叱られたわたし自身感動。すでに五十年にもなる今だにそのときの光景が思い出されてくる。西欧文化一辺倒の頃であったから、漢学者の先生には苦々しく思う競争心も少しはあったのかも知れないが、あそこまで言い切ってしまうと、さわやかなユーモアさえ感じられた。また、そのような時代に迎合することなく、自身の生き方に徹しようとする確固たる信念には知識人という以上に、求道者の情熱が感じられ、いつもの羽織袴姿がいつそう光って見えた。

昨日から明日への問い

急速にアメリカナイズされた戦後社会の学校教育では、才能教育は進んだものの、深い人間教育が失われていった。とくに、精神教育において。学校秀才を育てるだけの知育教育だけでは、人間は人形になってしまうか、あるいは、落ちこぼれになってしまう。そこでは、人間が本当の人間（真人）にはなれない。戦後の学校教育としてとくに唱道されてきた、知育、徳育、体育の三つの調和がとれた「全人教育」にしても、個性の乏しい既製品の人間を作ってしまう盲点があったことは否

めない。

明治より百年近い伝統をもつ一高の寮舎は、まもなく、永遠にその姿を消そうとしている。中川宋淵老師とともに、坐禅に精進した「三昧堂」もなくなるであろう。奇異な入寮式で知られていた「嚶鳴堂」は、すでに、戦時中の爆撃で消失した。人も家も、すべて形あるものは過ぎ去っていく。しかし、過ぎ去っていくことは無くなっていくのではない。新しいものを生み出していく力に変わらねばならぬ。あたかも、食べ物の形が消えて体を養う新しい血となり肉となるように。創造は伝統に根ざすことなくしてはありえない。創造力なき伝統はもはや屍でしかない。明日をつくるものは、両者をひとつにする「創造的伝統」である。

3. 若き日の挑み

青年会

学徒出陣にいたるまでの若き学生時代における不幸な聖書との出会いは、終戦後の復員、復学に続く東大時代において、思いもかけなかった一つの機会から、またさらなるキリスト教との激突を引き起こすことになった。

当時在籍していた法学部政治学科に通うために上京したのは、戦後まもなくの秋十月の頃だった。東大学舎の大半は幸いに爆撃の被害を免れて残っていたが、授業が正常化するまでには、なおほど遠い混乱状態であった。それに、まだ焼野原そのものであった街の中に下宿を見つけることも容易ではなかった。たまたま、高円寺の一角に、お寺とともに運よく焼け残った家が数軒あり、そこにあった、一高・東大時代の同級生のところに下宿させてもらうことができた。しかし、日本中どこも、貧困のドン底にあった時だけに、落ち着いて勉学のできる環境ではおよそなかった。そんななかで、町会長がわれわれ学生に青年会をつくるようにと呼びかけられた。それほど広い地域ではなかったが、思いがけぬほど多くの学生が集まってきた。男女合わせて四十人以上だった。おたがいに初めての面識なので、話がすぐにまとまるのは難しかったが、とにかく発足に漕ぎつけた。まず大切なのは、子供会ということ、つぎに、読書会、詩や俳句、和歌の会、映画鑑賞会、それに、

貧しいながらも、テニスやバレーボールといったスポーツなど・・・それぞれ、受け持ちを決めていった。ところで、当時の米軍司令官マッカーサー元帥がクリスチャンであり、その折々の演説の影響もあったのか、あるいは、カトリックもプロテスタントも、その他のキリスト教派も一斉に日本全国にわたって再宣教を競ってはじめたためか、「バイブル・クラス」を作ろうという提案がでてきた。ところで、困ったことに、青年会のなかには、その世話役をひきうけるものが一人もいなかった。青年会の会長と、そのときの司会をしていた私は、かつての、にがい思い出しかない聖書を読むことなどは真っ平だった。しばらく、皆が黙ってしまった。すると、一人の青年が手を上げ、私に向かって、「おまえ、坊主のような顔をしてるから、おまえやれ!」と大声でいった。一瞬、たじろいだ。「坊主のような顔」といわれたのも心外。それに、彼自身が寺の息子ということが分かり、大笑い。そのまま、気の進まぬ私に役がきまってしまった。

一人になっても・・・

引き受けたからには、やらねばならない。はたと困ってしまった。大の聖書嫌いの私である。聖書研究会の世話役などできない。良心的にもゆるされない。そこで、町会長を通じて、そばにあったカトリック教会に紹介してもらうことにした。そのとき、今江先生という大変熱心なカトリックの老婦人に間に入って話をつけてもらい、初めてカトリックの修道院を訪ねた。吉祥寺駅から北に十五分ほど歩いたところにある「アルベルト・ホーム」という神言会の男子修道院である。連絡もすでについていたのか、すぐに出てこられたのが小柄なドイツ人宣教師ナーベルフェルト師であった。髪の毛がなかったので、老けて見えたが、おだやかな、温かい愛につつまれた好々爺の感じだった。

用件を伝えると、すぐに尋ねられた。「何人ぐらい集まりますか?」「たぶん、十五名ぐらいは来ると思いますが・・・」と自信のない返事をした覚え。「そこで、一つ条件があります」と切り込んでこられた。「为什么呢か」というと、しっかりした口振りで「あなた一人になっても続けますか」と問われた。一瞬はとしたが、答えは一つ

しかない。「やめます」などと意地でもいえない。「はい、続けます」と答えた。「では、行きましょう」と言うことで決まり、毎週来てもらうことになった。

このひとときが、やがて私の生涯の方向を逆転させてしまうとは夢にも思わなかった。

聖書研究会

とにかく、責任上、聖書に一応目を通しておかねばと、前日までに、新約聖書だけでもと、猛スピードで一気呵成に読み通した。翌日は、教会の主任司祭であった野口師（後、広島司教）にも大歓迎してもらい、当時米軍から払い下げのカマボコ兵舎の司祭館で集まることになった。参加者は予測を越えて盛会、数人の修道女の姿が見られた。多分近くのメルセス会のシスターであったかもしれない。講義はよく知られた、マタイ福音書5章の「山上の垂訓」の箇所であった。話が終わると、いつものように質疑応答に入ったが、だれも質問をしないので、司会者の私がする羽目になった。話題はなんでもよいということであったので、前から気になっていた奇跡のことを尋ねた。返ってきたのはきわめて正統なカトリックの公式的解答。

「キリストは神でしたから、病気や罪で苦しんでいる人々を癒したり、飢えている人に食べ物を与えて、ご自分が愛と慈しみの救い主の神であることを示すために、そうした沢山の奇跡をなさいました」

そこで、若気の至り、ムラムラとなって私は猛然と反論した。「こんなに科学が進んだ現代社会にあって、そんな馬鹿げた作り話を信ずる人がいるということの方がよっぽど奇跡ですよ・・・」

それからの議論は全くの平行線。両者とも一歩も譲らず、固い雰囲気になってしまった。参加者の多くが躓いたのか、次の会では、ぐっと減り、五人前後になってしまった。さらに、会をかさねる度に少なくなって、やがて二、三人の近い友達だけ。それも、時々、用事があったりして欠席。ついに、一人になってしまうこともあった。しかし、男の約束、「ひとりになっても続けること」。しかし司祭館の部屋も借りにくくなって、戦災で壊されたままの聖堂の暗い片隅で二人だけの勉強に

なったこともあった。そこで、場所を吉祥寺の修道院に移すことになった。それからは、参加者の顔ぶれが変わり、幾人かの東大生や東京女子大の学生など、その他の青年をまじえて勉強会は活発になっていった。私はますます気炎をあげて、「キリストは偉大な宗教家であったとしても神ではありえない。その奇跡は教祖を神話化する民間伝説にすぎない」といつも懸命に主張していた。しかし、不思議なことに、ナーベルフェルト師は一度も集まりに参加されず私にまかせきりであった。

4. その時、なにがあったのか？

なににもなかったといえば、嘘になる。

なにかがあったといえば....？

猪突猛進

生まれ年が猪であったせいか、戦中の特攻隊のごとく、わたしは、聖書とカトリック教会に真っ正面から頭をぶつけていった。というのも、前に述べたように、聖書はキリストを神話化し、カトリック教会はそのキリストをさらに偶像化して、この二千年間、宣教や殉教の美名のもとに人類を欺いてきた元凶である、というのが、その頃の私の持論であった。そこで、長年の間にそのカトリック教会によってでっちあげられてきたキリストの仮面を剥ぎ落とさねばならないという使命感に私は燃え上がった。それからというもの、聖書にみるキリストの虚像を否定する理論を固めるため、まるで気が狂ったかのように猛勉強を始めた。洋の東西を問わず聖書学や神学書を読み漁った。古いもので有名なものでは、大逆事件張本人として処刑された幸徳秋水「基督抹殺論」(1911年)を夏休みに滞在していた寺で読み耽ったのもその頃。また、十九世紀のカトリック教会をゆすぶったフランスのE.ルナン「イエス伝」(1863年)の「比類なき人間キリスト」などに共鳴、また、独断的権威主義のために内部分裂をくりかえしてきた教会の悲惨な歴史を他山の石として、日本的キリスト教を掲げた内村鑑三の「無教会キリスト教」の理想にも学ぶものがあった。また、そこには、数多くの優れた知性人がいたなかで、とくに当時の東大総長南原繁や、その後任の矢内原忠雄総長らの直接また間接の影響も少なからず受

けた。それに少しばかり身につけていた英語と独語の知識を駆使して、ナーベルフェルト師の書棚や、東大のロックフェラー図書館などから、役立ちそうな論文や書物を狩り集めてきてはメモを丹念にまとめ、自分なりに納得のいく反カトリック的キリスト論の理論構成をめざしてガムシャラに突進した。

法学部卒業試験

ところで、独学一筋、指導者も協力者もなく孤立無援、泥沼に引き摺り込まれるような悪戦苦闘のうちに、アッという間に二年がすぎ、いつのまにか、法学部卒業期日が間近に迫ってきていた。というのも、生涯の課題として必死になって取り組もうとしたキリストとの格闘になんの関わりもない法学部の講義には全く興味がなく、旧制一校の頃から恩師でもあり、その時、東大文学部長であった桂寿一教授に願って、専ら哲学、比較宗教学など、文学部での様々な講義を夢中に聴講し回っていたため、法学部の卒業試験のことに気がついたとき、迂闊にも手元に本も講義ノートもない。ハタ！と困ってしまった。忘れてしまった復学後二年分の試験科目を一挙にパスしなければ留学か退学！そんな事になれば、いつも貧しい中から学費の仕送りをしてくれていた両親に顔も立たない。

そんな困惑の最中、「苦しい時の神頼み」、助け船が見つかった。というのも、「同病相哀れむ」、とやら、同じような窮地に陥って困っていた私のようなオサボリ学生のなかに旧制一校時代からの幾人かの仲間がいた。その連中が一緒になって共同戦線を張ろうということになった。順番にひとりが一科目、事前に要点をまとめる。試験前夜に一所に皆集まって三十分ほどその話をきく。翌日、皆そろって試験場に行くという形。一回勉強するだけで数科目の試験をパス。この方法は、幾つかの小課題に大いにパウワを発揮してくれた。しかし、私にはこれでも間に合わなかった。全受験科目を一挙にパスしなければならなかったからである。自分一人でやらなければならない幾つかの大きな課題が残っていた。そこで、別の助け船をひとりて工夫しなければならなくなった。

また思案の挙げ句、一つの小さな考えが、ふと

浮かんできた。格好良く「楯円理論」と名づけた。大したものではないのだが、とにかく、マスターキイのように、どの試験の扉も開けることのできる鍵のようなひとつのアイデアが欲しかった。今様にいえば、地球上どこにでもとどいて標的を粉碎する巡航ミサイルに比べてもよい。今ここで、その名(迷)案を解説する余裕はないが、いくつかの難関突破の新兵器になってくれた。とくに、威力を発揮してくれたのは、尾高教授の法哲学。最も難解な講義で、その試験も難しいといわれていた課目。わたしは、最後の二回の講義に出席しただけであった。ここで、初めて謎の新兵器、楯円理論を使用、数枚の長い答案を書いた。全くの自己流のものでしかなかったが、驚いたことに「優」という最高点をもらい、仲間の噂にまでなったくらい。そのあと、経済学概論やその他の試験にも応用し、どれも、まずまずの成果をあげて、我ながら、ちょっといい気持ちになっていた。「何でも来い!!」と。

ところで、すこし傲慢になっていたところで、思わぬ伏兵がいた。殆どすべての試験を通過して、最後に商法の試験が残っていた。悪いことに、わたしは、この授業に一回も出たことがなかった。著名な大内兵衛教授の試験だけに、大教室が学生で一杯だった。教授は黒板に二つの問題を大書した。

(1) 昨年、わたしは何を話したか？

(2) 来年、わたしは何を話すだろうか？

その他、今思い出せない小さな質問が二つ程あった。ショックを受けたのは、言うまでもなく、わたし達サボリ仲間。完全にノックアウト！授業に出ていた大半の学生にはご褒美のように有り難い、まことに易しい問題。私はヤラレタと思った。流石の名物教授。当時の学生を戒めるのに見事な質問。オサボリ組は、悔しそうに、「ダメダ！」と呟きながら次々と試験場を出ていってしまった。わたしの新兵器ミサイル、「楯円理論」も間に合わない。しかし、わたしは、その時、ここぞとばかり腹を決めた。と言うのも、ここをパスしないなら、いままでの努力は全く水泡に帰してしまうからである。じつと右手に鉛筆をにぎったまま数分.. 突如、思いついた。

(1) 昨年、わたしは何を話したか？

答 過ぎ去ったことに興味はない。

(2) 来年、わたしは何を話すだろうか？

答 あなたが知っていれば足りる。

次に、私は書き始めた。「このような愚問を出すべきではない。出すべき質問は“来年、わたしは何を話すべきか？”と問うべきである。それについて私は書く。」と前置きして、得意の「楯円理論」をふりかざし、時間の許す限り何枚も力一杯書いて答案を提出した。採点は「優」、しかも、大内教授はたいへん感心されたそうで、まるでオリンピックの金メダルをもらったように嬉しかった。この「楯円理論」最後の功績によって、昭和二十二年九月三十日、無事、東大法学部政治学科卒業。内容の全くない奇異な卒業証書を手にして故郷の父母のもとに暫く帰った。しかし、後は、世の常とする就職と結婚というように、事は簡単に運ばなかった。むしろ、予想もしなかった本格的な嵐の前の静けさのようなひと時であった。

虎穴に入らずんば虎児を得ず

さて、法学部は卒業したものの、肝腎の問題は、なお未解決。今となつては、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」とばかり、カトリック陣営の本丸に突入するしかない、と腹を決めた。高円寺教会でのバイブル・クラスは、前記のように失敗に終わったが、その後、吉祥寺の神言会修道院で集まりをもつようになってから息を吹き返し、そのうちにカトリックの司祭や信者の知りあいも多くなり、教会の様子も分かりかけると、カトリック神学の牙城といわれるものには、イエズス会とドミニコ会の二つの修道会があることを知った。そこで、当時、評判の高かったフランス人宣教師 S.カンドウ神父のすすめと紹介でそれぞれ東京の上智大学と京都の聖トマス学院の門を叩くことになった。

ところが、今思えば、それも神の摂理というのか、全くヒョンなことで、二つとも流れてしまった。そこで、東大に逆もどり再入学、宗教学科に籍をおくことになった。

虎児を得るため虎穴に入ることはできなかったが、虎穴に向かって猛火をあげせる火炎放射器の製作には東大での講義は恰好の場となった。

学科主任岸本英夫教授は、法学部にいた頃から

すでにモグリで聴講していたので、顔見知りでもあり、その生いたちにも関心があった。岸本先生はもともと、敬虔なクリスチアンの家庭に生まれ育ちながら、若くしてキリスト教に失望し、離教、宗教学者の道に入られたと聞いていた。講義の間に、折々口にされた言葉が思いだされる。

「宗教学者になろうと思うものは、どの信仰ももってはならない。なぜなら、一つの宗教に入れば、その信仰の色眼鏡で他の宗教を見るようになるからである。学問は、すべての物事を客観的に見る誠実な知性をもたねばならない。我田引水の主観的な見方はゆるされない。だが、宗教というものは、信仰をもたなければ、その真髄がつかめない。これが、宗教学者のジレンマである」

その他、小口偉一教授の「宗教社会学」の講義では、後にオリエント学会々長になられた三笠宮殿下と同席、研究室の窓ぎわで話し合ったことも思い出になった。聖書学やキリスト教、とくに、バルト神学の講義、その他、比較宗教学、比較文化論や、西洋哲学、印度哲学、倫理学などで出隆、中村元、和辻哲郎教授の講義を聴くこともできた。残念ながら東大の講義に欠落していた中世哲学は、岩下壮一著『信仰の遺産』や『カトリックの信仰』、吉満義彦の著書などで独学しなくてはならなかった。

授業の合い間や終わりには、今はすっかり現代西洋風に模様替えをしてしまった、かつての「山上御殿」の足元にある三四郎池の水辺に腰をおろし、考えの溢れるがまま、日の暮れるのも忘れてノートを書き続けた。雨の日は空いた教室やロックフェラー図書館の中にこもりながら。その間に年月は流れ、やがて二年半、論文の基本的部分ではできあがり、新しい周辺の知識による補強作業に入りはじめていた。それも、まもなく終了、昭和二十三年六月半ば頃、論文が完成した。

その頃は、ワープロもなかったもので、その後の仕事としては、再度、論文を読み直すとともに、清書するということであった。

蟹気楼—白紙の聖書と黒焦げのキリスト

ところで今思えば、愚かな悪戦苦闘のひとり相撲でしかなかった自我流の反キリスト論を書き終えたときは、それなりの満足感と、未来の大空を

飛ぶ期待に胸もふくらむ思いであった。若かっただけに、疲労というより、次の飛躍をめざしてのひと時の解放感を味わうなかに数日が流れた。

そのある日のこと、東京武蔵野にある、井の頭公園の人通りの少ない小道をひとり散策していた。昼すぎ二時頃であったかと思う。突如、眼前に白亜の巨城が蟹気楼のように浮かんできた。と、見上げる間もなく、こちらに覆いかぶさるように、崩れ落ちてきた。天を引き裂く稲妻のような一瞬の心象ドラマ。

思わず足を止めると、その廃墟に悄然として立つ影のような自分の前に、二つのものがあつた。まず、表紙はまっ黒、中は全く白紙の聖書。次に、気味悪いほど黒焦げになったちっぽけな木片のキリスト。生来、奇跡アレルギーの私であるだけに、思いがけない出来事に戸惑った。しかし、まもなく、その謎が解けてきた。

「白紙の聖書」とは、主題の欠落した聖書の象徴。事実、聖書の主題とは、キリストの奇跡と、その教訓にある。ところで、私が書きあげた論文の骨子は、その重要な二つの主題の否定にあつた。まず、福音書の中の奇跡を一切否定。次に、比較宗教学、とくに、仏教との比較からの結論として、福音的教訓には他宗教に勝るものはなにひとつ見られないということであつた。私の見た「白紙の聖書」とは、そうした聖書の全面的否定の象徴を意味していた。次に、「黒焦げの小さいキリスト」には、また別の意味があつた。私には、キリスト自身に対する敵意や反感は全くなかつた。むしろ、E.ルナンの見た「人類の比類なき師キリスト」の実像にこよなく憧れていた。そのため、奇跡によって神話化されたキリストの虚像を打ち壊すことに必死になった。しかし、その結果、白紙化された聖書から現れたキリスト像は、まさしく、惨めなまで黒焦げになった、ちっぽけなキリスト像でしかなかった。キリストという虎児を求めて虎穴に入ろうとした私が、火炎放射器で猛火を浴びせた虎穴の奥に見いだしたものは、黒焦げになった小さな死体の虎児キリストであつた。「白紙の聖書」と「黒焦げのキリスト」が、その直前に見た、崩壊する白亜の巨城と重なりあって、私は愕然とした。と同時に、魂の奥深くから、三つの言

葉が突きあげてきた。

「論文は完全に間違いであった。奇跡のないキリスト教はあり得ない」(*)

すぐに語をついて、

「今、私は、たとえ聖書に書かれていない奇跡であつても信じる」

かく言う私の傍らに影のように立つもうひとりの私が、よろめくようにして倒れ、呻くのが聞こえた。

「刀折れ矢尽きた」

それからの数日は、今テレビで見る、無重力状態の宇宙飛行士のように、地に足が着かず、体も浮きあがった感じで一種の放心状態が続いた。しかし強烈なショックでありながら何故か不安も焦りもなかった。たとえば、エンジン・ストップの故障を起こした航空機のようなもの、墜落はしないで、風に乗るグライダーのように飛行を続けるにも似て、思考停止のまま、何も考えず、何も読まず、何も書かないまま、灰色の日が流れた。

そのとき、ふと、旧制一高時代、陵禅会での恩師、中川宋淵老師を思いだし、三島の龍澤寺を訪ねることにした。

福井大地震

美しい富士の麓の三島駅に着いたのは昼ごろ。龍澤寺のそばを流れる小川の橋の袂で竹皮に包んだおにぎりを食べ、山門に着いたのは午後二時ごろだった。事前に連絡もしないで訪れたため、老師は留守ということで、夕方の帰宅を待つことになった。庭に面した廊下で座禅をしていると、突然、廊下とそのガラス戸が激しく揺れた。「あっ、地震」と思ったが、その後まもなく、雲水さんを通して、福井大地震のニュースが伝わった。(**)

そのうちに老師が帰ってこられ、部屋に通していただいた。戦中の学徒出陣以来久し振りということで、とてもよろこんでくださった。その日は、開山白隠禪師のご命日で、檀家からいただかれたうどんのご相伴になった。その間に、紆余曲折の魂の遍歴と、ここ二年余にわたるキリスト教との悪戦苦闘、そして、悲惨な挫折に終わった結末について話した。老師は、いつものように、温かい静けさを湛え、微動だにしない落ちついた姿勢で、私自身さえ説明しきれない数日前の摩訶不思議な

出来事までの長い話に、注意深く耳を傾けてくださった。話を終えると、老師はおもむろに口を開かれた。

「今、あなたはキリスト教がよく分かったと思う。しかし、まだ頭でしか分かっていない。体で分かるためには洗礼を受けなさい」

寂靜の大喝一声。それこそ、青天の霹靂というもの。老師からそのような言葉を聞くとは、全く夢にも思わなかった。

数時間前には、禪宗（曹洞宗）の総本山がある福井の大地震。開祖道元禪師と宋淵禪師の両者は、私にとってかけがえのない人生の先達であった。その禪の道に訣別してキリスト教の洗礼を受けよ、と命じられたときには、まるで、大地震のあとに、すぐ津波に襲われたようであった。

強いショックに、すぐに言葉もなく、しばし間をおいて、他の話題に移っていった。老師ご自身は淡々として、その場で茶をたてながら、ふるまってくださった。

その夜は、寺に一泊、翌日の早朝礼拝にあずかり、つづいて、老師の自室で、互に向かいあいながらの二時間あまりの座禅は、老師との法縁の訣別の時となるとともに、その後は、互いに宗教、宗派の壁を超えて、より深い親密なかかわりをもつ摂理的な契機となった。

受洗後、カルメル会修道院に入るため、フランスに旅だって行くことを誰よりもよろこんでくださったのも老師であった。その一枚のお葉書は、全く予期しないあらぬ道を行こうとする親不孝なひとり息子の将来を憂慮する両親にとって、大きな慰めとなり、励ましとなった。

(*) どこからか、天（神）からのものか、自分自身からのものか、定めかねた声は、今思うと、三つの格があったように思われる。「お前の論文」と呼びかける第二人称と、「私の論文」という第一人称、また、そのいずれでもない「そこにある論文」という第三人称が重なりあっていた。

(**) 昭和23年6月28日17時13分（当時夏時間）発生。マグニチュード7.1、3728名の犠牲者を出した。

5. ダブルパンチ

「キリスト教を体で知るためには洗礼を受けなさい」という思いがけない言葉を与えられて、中川宋淵老師にいとまごいをしたものの、実際にどうしたらよいものか、すぐには分からなかった。しかし、カトリック教会での洗礼のためには、「公教要理」（現在では「カトリック要理」）といわれる、問答様式にまとめられた神学の縮刷版に基づいて勉強をする必要があることは知っていた。ところで、その本にもまた、残念ながら、わたしにはよい思い出がなかった。例の聖書研究会を始めた頃、わたしをカトリックに導こうとした熱心な老婦人から手渡されたのが、その「公教要理」であった。聖書の場合も、初っ端から躓いてしまったように、この本の場合も同じ。

まず緒言からして問題…。「宗教は人の道を完うし、完全な幸福を得るために是非必要であります。しかし、どんな宗教でもよいというわけではなく、唯だ真の宗教によってのみ、その目的を達することができます。そして、天主は御一体、真理は一つ、人の真の道も一つでありますから、真の宗教は唯一つあるのみであります。その上、天主に対する人の道は、人が自由に決めることではありませんから、真の宗教は天主の啓示し給うたものでなければなりません。幸い天主は人々に真の宗教をお示しになりました。」

禅仏教に熱中していた当時の若い学生時代のわたしにとって、上記のような、キリスト教だけが「唯一の真の宗教」であるという主張は全く受け入れられなかっただけでなく、その宗教的傲慢に堪え難い憤りを覚えた。

次に、「第一課 人の目的：人は何のために、この世に生まれてきましたか。人がこの世に生まれてきたのは、天主を知り、天主を愛し、天主に仕えて、ついに、天国の幸福を得るためであります。」

この答えは、一瞬、わたしの心のなかに複雑な波紋をつくった。生まれること、そして生きること、愛すること…。まさに、人生の「大疑団」が、冒頭に取り上げられていることには、強い印象を受け、共感を覚えた。だが、それに比して、答えの簡単さにあきれかえった。一生問いかけても答えのない、人生の最大の課題を、わずか、一行の答

えで片付けられているのに愕然とした。宗教的大天才、釈尊にしても、その問いに六年にわたる瞑想を続けなければならなかった。達磨大師の「面壁九年」もしかり。

旧制一高時代に知った藤村操の有名な「巖頭之感」も忘れられない。当年わずか十七才の若さで人生とこの宇宙の神秘を問うことに命をかけた真剣な哲学青年の自死の物語は、今も向陵自治寮史に不滅の記録として残されている。

「悠々たるかな天壤。遑々たるかな古今。五尺の小軀をもってこの大をはからんとす。ホレーショの哲学、ついに何等のオーソリティに値するものぞ。万有の真相は唯だ一言にして悉、曰く、「不可解」。我この恨を懷いて煩悶終に死を決す。すでに、巖頭に立つにおよんで胸中何等の不安あるなし。初めて知る、大なる悲観は大なる樂觀に一致するを。」

日光華嚴の滝の傍らにあった桜の幹を削り、墨痕鮮やかに書き残された壮絶な人生の苦悶は、少なくともわたしと同世代の日本人なら、その心の奥深くに響いてくるものがあるのではなからうか。

このような時代にあった当時のわたしにとって、「公教要理」の説明は、全く、実も花もない愚答でしかなかった。正しいとか、間違っているとかの次元ではない。誰にとっても、人生は考えれば考えるほど深い神秘であるはずなのに、余りにも簡単に整理してしまう要理の割り切り方が情けなかった。血も涙もない干からびた言葉。「正解であるとしても真実ではない」。そこでは、知性の論理と心情の論理とがかみ合わない。「複雑な心の波紋」と言ったのはそのことである。長年にわたって悪戦苦闘した聖書の場合とは別の文化的違和感に由来する躓きであった。まさに、カトリックにダブルパンチを喰わせた、否、逆に喰わされたとでもいうのであろうか。ともあれ、この二つの大疑団、「真の宗教とは？」と、「人生とは？」という問いは、受洗後五十年になる今にいたるまで、形を変えてわたしの魂の奥深くに棲息している。現代神学のブームとなりつつある、「宗教対話」や、「福音と文化」という課題は、わたしにとって、キリスト教との衝撃的な出会いのうちにすでに端を発した永遠の課題であった。

子供要理教室

例の反キリスト論を書き上げた頃は、高円寺の友人の家をでて大森の下宿に移っていた。中川宋淵老師をお訪ねした時も、そこから三島の龍澤寺に出かけた。それまで、頭ばかりで、気が狂ったかのようにキリストを追いつめていたのが、老師の一言で、突如、ひっくり返ってしまった。それから、また、しばらく呆然として二カ月ほど時がたつうちに、静かに心の傷口が癒され、キリストに激しく挑んだ自分の身の程知らずの知的傲慢を痛いほどに感じ始めた。

その頃ふと、どこからか、確かなひとつの声が聞こえた：教会に聞け。その時、「教会」という言葉の意味がすぐに掴めなかった。はっきりとしているようで、何か広く漠然としていた。とにかく、地図をみると、下宿に近い大森教会があることが分かった。うろろろしていても仕方がないと、腹を決めて、紹介状もなく、見ず知らずのその教会を訪ねることにした。戦後三年目、司祭館といえるようなものではなく、米軍払い下げの「かまぼこ兵舎」。太い針金でしばったドアを叩くと、神父が出てこられて、数分の立ち話。「公教要理を教えてほしいのですが...」というのと、「うん、いいぞ。次の木曜日の朝、九時に来い」、「はい」と一言できまる。それが、数年前に帰天された恩師、「われらのおやじ」の名で知られた下山正義師であった。

ところで、その日、約束通り出かけていくと、数人の子供たちが部屋の中をかけまわって遊んでいる。九時。下山師が入ってこられる、子供たちはピンポン台を囲んでパタパタと腰掛ける。何が始まるのか分からないままに、私も彼等と一緒に並ぶ。まず短い祈り。それから、約二十分ぐらいの話で終わり。解散。急いで子供たちは飛び出していく。私は一人取り残されてガランとした部屋にしばらくひとりぼっち。狐につままれたように。それが最初のレッスンであった。行くところもなく、隣の建築中の聖堂に入って、一時間ほど祈るともなく、静かに思い巡らしていた。当て外れであったことは言うまでもない。しかし、なぜか、騙されたような気にもならず、憤懣も感じなかった。その時の話は全く子供向きの話。わたしには、なんの興味もなく、為にもならない事ばかり

りであったのは言うまでもない。ところが、奇妙なことに、その子供用の話を何回も繰り返し聞いているうちに、なにか、バック・ミュージックのように心地好くなり、そのあいだに、いくつも頭に浮かんでくる、神学の難問がブルドーザーでどんどん整理されていくように思われた。それから、子供要理教室が楽しくなってきた。それに、子供たちと遊ぶのも楽しかった。「幼子のようにならなければ天国に入れない」というキリストの福音的教育法であったのだろうか。とにかく「公教要理」の講義らしきものは、一度も教えられないままに二カ月ほどの時が流れた。自分で読み直したり、個人的に質問をして話し合ったりするうちに、いつの間にか頭と心とが整えられていった。

「蝮の裔よ、回心せよ！」(参照、ルカ 3,7-9)と、下山師が後ろからわたしの肩を叩かれたのは、その頃であった。ところで当時は、受洗のためには、一応、筆記試験を通らねばならなかった。下山師の部屋の中で答案を書かされた。「第一問 神の存在を論証せよ」。調子に乗って、十数枚びっしり書いたことを記憶している。ところが、第二問 聖母マリアの被昇天の日は何日か？ 理屈っぽいことは得意であるのに、幼稚園児でも知っているこんな簡単な問題となるとお手上げ。不意をつかれた感じ。さて、そばの机を見ると「公教要理」がおいてある。悔し紛れにカンニングと決めた。それも、受洗前の罪は、洗礼によって、すべて許される、という都合のよいカトリック要理の教えを思い出した。「マリア様おたすけを！」と願いつつ、滑り込みセーフ。とにかく、学生時代には、プライドもあって、一度もしたことのないカンニングをやったのけた天国泥棒。1948年12月12日(無原罪聖母公式祭日)、大森教会で下山正義師により受洗。

下山師は、わたしの受洗のための試験のことで、皆に、いつも、ヘンな自慢をしておられた。「オレ、あいつの答案に落第点をつけてやった。やたらと長く書きよったからな、アッハッハ...」第一問の「神の存在についての論証」のことだった。カンニングのことなどはどこへやら、まったく頭になかったらしい。ともかく、ちょうど五十年前の洗礼という出来事が、やがて、全く予期しない

人生の方向を生み出していくことになった。

6. カルメルへの道

偶然から偶然へと・・・

カトリックの受洗は、前記のように、1948年12月12日であったが、その翌々日、14日（火曜）は、宗教学科でのレポートを発表することになっていた。初めに考えていた論文の主旨は、例の粗暴な反キリスト論と、カトリック神学批判のつもりでいたが、全く思わぬ道の紆余曲折、果てには受洗にまで至ったため、その論文を公表することができなくなってしまった。かといって、それと全く逆の論文を用意する時間も心の余裕もない。ハタと困ってしまった。そこで、岸本主任教授の了承を得て、以前のままの論文を公表ことにした。発表の折には、まず、次のような弁解を添えるしかなかった。「これから発表させていただく論文は、現在のわたしの考えではなく、今になっては、嘔吐のように吐き捨てたいものです。そのつもりでお聞きいただけましたら幸いです」と前置きしながら、約一時間にわたる研究発表を終えた。「奥村君、君のようなカトリックがいるとは驚いたネ。これから大丈夫かな？」と、心配げに、いつもの温顔をみせながら、ひとこと言われた、今はなき、岸本先生が懐かしく思いだされる。

十字架の聖ヨハネ - 『Dark Night (暗夜)』

さて、ひとつの峠を越えたと思っていたら、またすぐに、学期末のもうひとつの課題が迫っていた。「東西神秘主義」というテーマでの岸本先生の講義に関連する小論文の提出ということだった。

それまでは、主に、禅思想を中心とした東洋神秘主義にのみ関心をもってきたので、カトリックの受洗直後ということもあり、西欧のキリスト教神秘主義をとりあげたいと思った。ところが、まだ、その方面での知識が乏しく、その上、提出期限が迫ってきたため、途方にふけていた。そうこうするうちに、思わぬところで助け舟に出会った。

ある日、東大赤門から出て帰宅の折、中央線御茶ノ水駅近くの交差点で、友人Sにバッタリ会った。彼は哲学科の学生だったが、カトリックの幼児洗礼を受けており、教会のことに詳しかった。早速、例の論文テーマに困惑していることを話す

と、「十字架の聖ヨハネ」という十六世紀スペインの神秘家を奨めてくれた。しかし、わたしには全く初耳、その著書や参考資料もない。そこで、「カルメル会という修道会の聖人だから、上石神井にある女子カルメル会修道院にいけばいいよ。すぐに、本など貸してくれるよ・・・」という彼の話に乗り、早速、その足で女子カルメル会修道院を訪ねた。現在は、イエズス会の黙想の家として使用されているが、外塀や大門などは、今もその頃の趣を残している懐かしい処。シスターは、すぐに聖ヨハネのいくつかの著書をもってこられた。いずれも英訳か仏訳。邦訳はなかった。藁をもつかむ思いで、とにかく一冊厚めの本を借りてきた。聖ヨハネの代表作のひとつ、『カルメル山登攀』だった。本の冒頭には「Dark Night (暗夜)」という、八節からなる詩が載せられていた。それに続く章は、その詩にもとづく解説の形で神秘的な霊性体験が綿密にしるされたかなり部厚い本であった。英文では、日本語のように早く読めず、消化もむづかしい。それに、提出期限も間近。ここでもまた行き詰まった。以前の東大法学部の卒業試験の折のような頓知もすぐには出てこない。ここで思いついたのが、次の方法。

著者、聖ヨハネにならい、その「暗夜」という詩について全く我流の解説をすることにした。今思えば、汗顔の至りだが、背に腹はかえられない。とにかく、レポートはさいわい合格。神に感謝。

ところで、借りた本は、また、女子カルメル会修道院に返しに行かねばならない。それがまた縁となって、やがてわたしの未来を方向づけるカルメルへの兆しが見えはじめてきていた。

というのも、十字架の聖ヨハネの神秘的霊性は、長い間親しんできた禅の霊性、とくに、道元禅師の教えと余りにも近いと知ったことが、カルメル会への関心を急速に深めることになった。とくに、聖ヨハネの小品集、「霊的勸告集」は、その頃から座右の書となった。

幼いイエスの聖テレジア - 『小さき花 (自叙伝)』

今では、中部地区の代表的カトリック大学となっている名古屋の南山大学の体育館をかりて、神言会司祭、故ゲマインダ師の指導による青年黙想があり、それに参加したのは、受洗後まだ一年

にならぬ、昭和二十四年の夏八月十日頃のことであつた。四日ほどの短い期間であつたが、なにしろ受洗後はじめての青年黙想会。退屈だつたことだけを記憶している。ガランとした体育館の隅の方に、八つほど、藁のマットスが無造作に並べられ、そこで、皆いっしょにゴロ寝をしていた。傍らには、数冊の黙想用の本が机の上におかれていた。

二日目ぐらいだつたらうか。退屈しのぎに、なんの気なしに手にとつたのが、幼いイエスの聖テレジア自叙伝、「小さき花」であつた。

気楽に読み進むうちに体ごと吸いこまれるほど、その本に魅了され、一挙に読み通した。本をとじて机に返したときには、まるで、的を目指して一直線に飛びたつ矢のように、私の魂の視線は、はっきりとカルメルに向かつていた。

マッチにたとえれば、マッチの軸にあたる木の部分が十字架の聖ヨハネ、火がつくマッチの頭の部分が、小さいテレジアであつた。

難関

名古屋での黙想を終えてすぐ、故郷の岐阜に両親を訪ねた。二回目の大学卒業も間もない頃になつていたので、その後の方針について話し合ふなくてはならなかつた。結婚の話もすでにいくつかあつた。受洗後、下山正義師にすすめられ、神父になる道について話したこともあつたが、父は全く相手にしないどころか、激怒した。

今度は、さらに受けいれられそうもない話。遠い異国のフランスに行つて、カルメル会という、およそ耳にしたこともないような修道会入会ということになると、両親は、一体、どのように受け

とめてくれるだろうか、全く予想できなかった。それに、わたし自身全く未知な世界であるだけに、質問されても答えようがない。

しかも、戦後まもなくの貧困のなかで、二度までも大学に学ぶことをゆるしてくれた両親、また、幼い頃姉を失つたわたしは、両親の生活のことも考えねばならない一人息子の身でもあつた。

家に着くと、すぐ父が迎えに出てくれた。いっしょに廊下の椅子に腰をおろす間もなく、「お前、将来はどうするつもりか?」と、とり急ぐようにきかれた。「カルメル会という修道会に入りたい。そのためには、まだ日本に男子カルメル会がないため、フランスにまで行かなくてはならない」と、簡潔に答えるわたしの方を見て、しばらくだまつたまま、目を伏せた父の姿は今も忘れられない。再び、強く拒絶されるかと思つていただけに、そのときの一瞬の沈黙は深く重かつた。やがて落ちて着いた様子で父は口を開き、「お前がよく考えて決めたことだと思うから、おれは反対しない」と、ゆっくり答えてくれた。

急に、大きな肩の荷がおりたように互いに顔を見合わせた。すると、父はさらにひとことつけ添えた。「だが、始めたことは必ずやり通すことだ」

この一語がどれほどの意味をもつかは、その後のカルメルにおける五十年近い修道生活での多くのことが物語つてくれた。自ら恥じることばかりの自分をふりかえるとともに、あのときの尊い父の励ましと、十年前に他界した父のあとを追うかのように帰天した母のいつもあたたかく静かな沈黙の眼ざしを今も思う。

〔奥村一郎氏は、1923年、岐阜県生まれ。東大宗教学科には、法学部卒業後再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマで司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活躍。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書に、『祈り』、『断想』（ともに女子パウロ会）、等。本稿は、氏が近年、雑誌『Vitalité』誌上に発表されている回想記のうち、同氏の希望により、東大在学時代の思い出に関する部分に手を入れていただいたものである。〕